カトリック教徒とナチズム

野田宣雄

まえおき

ワイマル共和政末期、議会選挙においてナチスの好餌となったのは、なによりも中間層を主体とするプロテスタント系選挙民であり、それにくらべて、カトリック系選挙民へのナチスの浸透は（社会主義系の労働者の場合と同様に）控え目なものにとどまった。カトリック教徒によって構成される中央党およびバイエルン人民党の支持基盤は、ナチスの興隆過程でもいちじるしい安定性をしめし、得票数の増加さえ見せた。

こうしたプロテスタント系とカトリック系の選挙民のナチスにたいする反応の違いそのものは、すでにこれまでの研究でもしばしば指摘されている。だが、この相違の意味するもの、あるいは、この相違の背後にあった要因については、じゅうぶんに解明しつくされているとはいえないだろう。従来のナチズム研究は、農民・手工業者等の中間層とナチスとの関係についてはそれなりに多くの成果をあげ、その関連で、この階層に特有な経済的利害や身分意識などを浮き彫りにすることに成功してきた。けれども、多くの場合、そこで問題にされるのは宗派の別にかかわりのない農民一般や手工業者一般であるにすぎなかった。いいかえれば、農民・手工業者等の中間層のなかでなぜ別してプロテスタントがナチスの支持にむかったのかという点は、あまりかえりみられることはなかったのである。①

他方、カトリック教徒が比較的ナチスの浸蝕をうけなかったという点については、これまで、カトリックの教会組織のつよさや中央党という伝統的なカトリック政党の存在がごく一般的な形で指摘されるにとどまった。そしてそれ以上にカトリック系中間層の利害や意識などがたち入って分析されることは少なかった。②

こうして、ナチス研究は奇妙な分裂をしめしてきたようにみえ

る。すなわち、ナチスの支持基盤にかんしては、経済的利害や身分意識などの観点から解明がおこなわれるのに、ナチスの浸蝕を比較的まぬかれたカトリック選挙民については、教会組織といった、それとは次元を異にする視点がもち出されてきたのである。このような研究方向の分裂を克服することが、現在のナチズム研究には必要なのではあるまいか。

考えてみれば、プロテスタントとカトリック教徒の双方がナチズムを前にしてしめした反応の相違ほど、比較政治文化の恰好のテーマはないであろう。だが、比較が有意味におこなわれるためには、比較の対象となっているものをできるだけ共通の尺度で分析する必要がある。いまの場合、もちろん、それはけっして容易なことではない。しかし、プロテスタントとナチスとの関係についてえられた研究上の視角をカトリックの世界に投げ入れ、逆にカトリック教徒にかんしてえられた見方をプロテスタントの世界に投げかえしてみるという往復運動をくりかえすことにより、多少とも有意味な両者の比較に近づくことができるであろう。

それはまた、ナチズムの研究の前進にもなんらかの寄与をもたらしうるかもしれない。というのも、なぜワイマル末期にナチスが広汎な大衆的基盤を獲得できたかという問題は、たんに当時ナチスを支持した人びとのことばかりでなく、ナチスを支持しなかった人びとのことをも知ることにより、よりよく照射されると考えられるからである。本稿は、そうした底意を秘めた、ささやかな端緒的こころみにすぎない。

① ナチスの社会的基盤、とくに中間層との関係についての最近の研究動向については、次を参照。E. Henning, Bürgerliche Gesellschaft und Faschismus in Deutschland. Ein Forschungsbericht (Frankfurt a. M. 1977). 拙稿「ナチ党の地方指導者」（『史林』六一巻三号、一九七七年）。

② cf. A. Milatz, Das Ende der Parteien im Spiegel der Wahlen 1930 bis 1933, in: E. Matthias u. R. Morsey, Hg., Das Ende der Parteien 1933 (Düsseldorf 1960), S. 755, 760, 768; Morsey, Die Deutsche Zentrumspartei, in: Matthias u. Morsey, Hg., op. cit., S. 416; K. D. Bracher, Die Auflösung der Weimarer Republik (Düsseldorf 1957), S. 89 ff.

一　若干の地域別考察

ナチスが急速な伸びをしめしたワイマル末期の一連の国会選挙で、カトリック政党である中央党およびバイエルン人民党は一五%前後の得票率を保持し、一九三二年七月の選挙では得票数を約六〇万票ふやすことにさえ成功した。このような簡単な数字によっても、カトリック教徒の間へのナチスの進出が大きな限界をもっていたことをうかがうことができるだろう。しかし、ナチスに

たいしてカトリック教徒と新教徒とがしめした反応の相違をよりよく把握しようとすれば、どうしても地域別の考察にまで下降してゆく必要がある。というのも、新旧両教徒はドイツ全土にわたって一様な仕方で混在していたわけではなく、両者の比率は地域ごとに――しばしば郡もしくは村単位で――顕著な差異を見せ、したがってまた、両者のナチスにたいする反応の相違も、そうした地域単位であざやかにあらわれることが少なくなかったからである。

(一) オルデンブルクの場合①

典型的な農民経営の優越するオルデンブルクでは、北部および中部の郡における新教徒の比率は九〇%をこえたが、南部の三つの郡では、逆に旧教徒が九一%をしめていた。そして、まさにこうした宗派構成上の顕著な相違が、そのまま両地域におけるナチズムにたいする投票態度の大きな差となってあらわれた。

オルデンブルク邦は、すでに一九三〇年九月の国会選挙においてナチスが二七・三%という全国最高の得票率をあげ、さらにその後の邦議会選挙におけるめざましい進出（一九三一年＝三七・二%、三二年五月＝四八・四%）をへて、三二年にいちはやくナチスの単独政権の樹立された邦である。だが、こうしたオルデンブルク邦におけるナチスの成功は、その圧倒的部分を新教地帯に負うていたのであり、それにたいしてカトリック地帯におけるナチスの進出はきわめて控え目なものにとどまった（第1表参照）②。

第1表　オルデンブルクにおけるナチスの得票率（%）

	1930年9月 国会選挙	1931年5月 邦議会選挙	1932年5月 邦議会選挙	1932年7月 国会選挙
新教郡部地域	42.8	56.0	65.7	63.5
旧教郡部地域	4.3	8.8	16.6	14.3

もちろん、新教地帯にかぎってみれば、ナチスの得票率は都市よりも農村において高く、また、比較的経営規模の小さな自営業者の優越する地域においてより有利な数字をしめした。さらに都市についても、労働者の比率が相対的に低い中間層的な構造をもった都市においてナチスは比較的強力であった。これらの事実は、たしかに、農民や自営中間層がとくにナチスの宣伝にひっかかりやすかったという周知のテーゼを確認させるものである③。

しかし、見のがしてならないのは、ナチスがあまり進出できなかったオルデンブルク南部のカトリック地帯もまた、典型的な農民経営が優越する地域であり、しかもゲースト地帯であるこの地域において、不況の農民への打撃もとくにきびしかったという事実である④。こうした事実に照らせば、ナチスと中間層の親和性を強調する例のテーゼは、オルデンブルク南部のごときカトリック農村には妥当しないということになろう。

あらためてことわるまでもないが、オルデンブルク南部のカトリック地帯では、ナチスの進出が控え目なものにとどまったのは、中央党の選挙基盤がきわめて安定していたからであった。第1表にあげたワイマル末期の三つの選挙について、オルデンブルク南部のカトリック三郡における中央党の得票率は、それぞれ、七六・一％、七五・四％、六五・七％であった。三三年の邦議会選挙で後退が見られるものの、全体として中央党の選挙基盤のおどろくべき強固ぶりが確認できるであろう。[5]

（二）バイエルンの場合[6]　オルデンブルクと共通した事情は、バイエルンについても指摘できる。ここでも、ナチスがもっともよく進出できたのは、農村のなかのとくにプロテスタントが優越した地域であり、それに比して、同じ農村でもカトリック教徒の優越する地域では、ナチスは弱体であった。以下においては、とくに興味ぶかい事例として、オーバーフランケンのエーバマンシュタット郡の場合を紹介しておこう。

この圧倒的に農業の優越する郡は六八の村落（その大半は人口六〇〇人以下）から成っていたが、そのうち三五村が九〇％以上、五村が八〇％以上のカトリック人口を有し、また、一六村が九〇％以上、六村が八〇％以上のプロテスタント人口をもっていた。要するに、大部分の村が新旧両派のいずれかに明確に色分けされたのである。しかも、この郡の地図を見てもわかるように、カトリック村とプロテスタント村とがかなり入りみだれて位置していたから、ごく近接した距離にある二つの村が相互に対照的な宗派色を見せる場合があったのである。[7]

ワイマル末期には、この外界との接触のきわめて少ない、いわば後進的な農村地帯でもナチスが進出を見せ、たとえば一九三二年四月のバイエルン邦議会選挙では四三％もの得票率をあげた。しかし、その場合にも、新旧両派のいずれに色分けされるかによって各村の選挙結果に顕著な相違があった。そのことは、一九三三年三月（つまりヒトラー政権成立後）の国会選挙の結果を見ても明らかである。すなわち、このときの選挙において、新教徒人口が八〇％をこえるすべての村ではナチスの得票率も八〇％以上であった。ところが、カトリック教徒が八〇％以上をしめる三九村のうち、三〇の村ではナチスの得票率は四〇％以下にとどまった。そして逆に、カトリック政党であるバイエルン人民党が七〇％以上の得票率をあげた村が二一、九〇％以上の得票率をおさめた村が六もあった。このときの選挙の独自な性格を考えれば、これらは一驚にあたいする数字であろう。[8]

もっとも、エーバマンシュタット郡のカトリック村のなかにも、三三年三月の選挙でナチスが六〇％以上の票を獲得した村が三つ

ばかりある。それらの村はとくに農業の収益性の低いところで、ナチスは貧困な農業労働者プロレタリアートをひきつけたのであった。しかし、これらの村でも、自営農民などによって構成されるバイエルン人民党（および他のブルジョア政党）の基盤は比較的安定性をたもっていた。[9]

バイエルンにかんしては、いま一つ興味ぶかい事実を指摘しておかねばならない。それは、ワイマル末期の選挙でバイエルン農民同盟がしめした動向である。全体として見れば、バイエルン農民同盟もナチスの進出とともにその勢力を後退させていった地方政党であり、その意味ではシュレースヴィヒ＝ホルシュタインなどの他の地域の地方政党と共通した運命をたどった。だが、少したち入って検討してみると、カトリック教徒の優越する地域とプロテスタントの支配的な地域とでは、バイエルン農民同盟がナチスにたいしてしめした反応にはいちじるしい差のあったことがわかる。カトリック地域では、農民連盟の支持基盤がナチスによって喰われることは少なく、その勢力が後退している場合でも、それはバイエルン人民党の勢力増大によってつぐなわれていた。これにたいし、プロテスタント地域では、それまでの農民連盟の支持基盤が恰好のナチスの餌食となったのである。このことは、カトリック的環境が優越しているところでは、農民連盟のような農民の利益擁護を主眼とする地方的な政治勢力さえもがナチズムにたいして大きな抵抗力を発揮したことをものがたっている。[10]

(三) エッセンの場合[11]

右にあげた若干の事例からもうかがわれるように、カトリック教徒は、農村地帯の、それも郡単位や村単位でカトリック教徒の比率が圧倒的に高いようなところで、とくにナチスにたいする堅固な塁を形づくった。いいかえれば、カトリック教徒のナチズムにたいする免疫性は、比較的閉鎖的な農村的地域社会のカトリック的環境もしくはカトリック的カルチャーとふかい関連性があったと推定することができる。

しかし、カトリック教徒のナチズムにたいする抵抗力や免疫性を論ずる場合、農村地帯の農民や手工業者などの中間層をとりあげただけでは、けっしてじゅうぶんではない。というのも、たとえばエッセンのように商工業が優越し、農業人口の比率の低い地域でも、カトリック教徒の大きな部分がワイマル末期の選挙できわめて安定した姿をしめしているからである。

カトリック人口が五四％をしめるエッセンでも、一九三〇年以降の一連の選挙でナチスが共産党とともに票を伸ばした。だが、中央党は左右いずれの過激主義にたいしても堅固な防禦をほこり、三三年三月にいたるまでこの地域における最強政党でありつづけた。とくにナチスが二四％の得票率を記録した三二年七月の国会

選挙でも（ナチスの得票率の全国平均三七・四％との差に注意）、中央党は得票の絶対数をふやすことに成功した。このような中央党の安定ぶりを支えた要因としては、さしあたり、カトリック教徒の投票率の上昇や婦人票の比重の高さなどのほかに、カトリック系労働者の忠誠ぶりをあげておかねばならない。もちろん、一般的にいえば、中央党のカトリック教徒にたいする把握力は、工業化や都市化に逆比例して低下するという傾向をもっていた。だが、エッセンの場合に見られるように、カトリック労働者協会やキリスト教労働組合などの組織の伝統的につよかった地域では、ワイマル末期の時点でも、カトリック系労働者が中央党の安定した基盤を形づくっていたことを忘れてはならないだろう。⑫

それにしても、農村の中間層から都市の労働者にいたるまでの広汎なカトリック教徒をナチスの大幅な浸蝕から守りえたカトリック的政治文化とは、いったいどんなものであったのだろうか。

① 以下のオルデンブルク邦にかんする記述は次による。K. Schaap, Die Endphase der Weimarer Republik im Freistaat Oldenburg 1928–1933 (Düsseldorf 1978). なお、行論中、オルデンブルク邦としるす場合にはオルデンブルク邦全体を、たんにオルデンブルクとしるす場合には同邦中のオルデンブルク地域（Landesteil）を指す。

② シャープの記述より筆者が作成。cf. Schaap, op. cit., S. 117, 188, 213.

③ Ibid., S. 118.

④ Ibid., S. 29, 33.

⑤ Ibid., S. 149, 188.

⑥ 以下のバイヱルンにかんする記述は主として次による。D. Thränhardt, Wahlen und politische Strukturen in Bayern 1848–1953 (Düsseldorf 1973); M. Broszat, E. Fröhlich u. F. Wiesemann, Hg., Bayern in der NS-Zeit. Soziale Lage und politisches Verhalten der Bevölkerung im Spiegel vertraulicher Berichte (München 1977); R. Hambrecht, Der Aufstieg der NSDAP in Mittel- und Oberfranken (Nürnberg 1976).

⑦ Broszat u. a., Hg., op. cit., S. 20, 32, 36.

⑧ Ibid., S. 49 f.

⑨ Ibid., S. 50 f.

⑩ Thränhardt, op. cit., S. 171, 179 f.

⑪ 以下のエッセンにかんする記述は次による。H. Kühr, Parteien und Wahlen im Stadt- und Landkreis Essen in der Zeit der Weimarer Republik (Düsseldorf 1973).

⑫ Ibid., S. 30 ff., 43 ff., 50 ff., 72, 277 ff., 292 ff., etc.

二　帝政期のカトリック政治文化

ナチズムを論じようとする場合、たんにワイマル期ばかりでなく、さらに帝政期にまでさかのぼってドイツの政治・社会を問題にする必要があることは、今日の常識といってよいだろう。このことは、ナチズムにたいするカトリック教徒とプロテスタントと

の反応の相違を扱う場合も例外ではない。すでに帝政期において、ドイツのカトリックの政治文化はプロテスタントのそれとどのように違っていたのか――ワイマル期への展望を心がけながら、まずこの点を問うてみなければならないだろう。この点でも、従来の研究は、帝政期からナチズムへの発展の連続性を強調するあまり、新旧両宗派の差異にたいしては比較的無関心だったようにみえる。

(一) サブ・カルチャーとしてのカトリック世界

周知のように、文化闘争は一八八〇年代には終熄にむかったが、それによってドイツの政治・社会におけるカトリック教徒の独自な地位が消滅したわけではない。一八九〇年代以降の時期に入っても、カトリック教徒は、プロテスタント文化の優越するドイツの政治・社会のなかで不利な状態におかれつづけるのである。

まず職業上の地位について見ても、カトリック教徒の職業がプロテスタントに比して農業にかたより、工業・商業・流通部門への進出がいちじるしく遅れていたことはよく知られている。だが、さらに重要なのは、各部門の社会的成層構造のなかでカトリック教徒のしめていた位置である。きわめて概括的にいえば、農業を例外として、他の多くの職業部門においてカトリック教徒の構成は労働者・職人・徒弟などの下層に大きくかたより、所有者・経営者などの上層、またとくに中級管理者・技師等の中間層には、プロテスタントにくらべてカトリック教徒は少ないのである。

カトリック教徒の職業上の地位にかんしては、彼らが将校・高級官僚・教師・自由職業等の分野において劣勢であったことも注目にあたいする。たとえば、将校・軍医等の八三・二%はプロテスタントによってしめられ、カトリック教徒はわずか一六・五%にすぎない。また、高級官僚の七一・五%がプロテスタント、二五・九%がカトリック教徒であり、判事・検事の七一・二%がプロテスタント、二四・五%がカトリック教徒であった。

次に、当時の国民に間における富の配分や生活水準を見ても、ユダヤ人、プロテスタント、カトリック教徒の順位で、カトリック教徒がもっとも劣った地位にあったことがわかる。たとえば、プロイセン邦の場合、全人口中にカトリック教徒のしめる比率は約三分の一以上であるのに、カトリック教徒がおさめる所得税額は全体の六分の一以下だった。[1]

ここでこれ以上数字を列挙することは控えるが、右に紹介した事例からも、二〇世紀初頭のドイツのカトリック教徒が工業化や教育の普及をふくむ近代化・世俗化の過程で不利な、とり残された状態にあったことを知ることができよう。しかし、帝政期のカトリック教徒の特異な地位は、たんなる近代化・世俗化過程にお

ける遅れの問題としてだけでは説明しつくされない。重要なのは、カトリック教徒が社会主義系労働者とならんで当時のドイツのなかで独自のサブ・カルチャーを形成していたということである。

カトリック教徒のカルチャーが、カトリックの倫理や教会活動によってふかく規定されていたことは、いまさらことわるまでもない。そして、ヴェーバーの有名なテーゼをもち出すまでもなく、カトリック教徒が近代的ビジネスへの態度や日常の禁欲問題等においてプロテスタントとはいちじるしく異なった心情をもっていたことも、周知の事実である。しかし、ここでは、帝政期のドイツにおける彼らの独自なカルチャーを象徴する問題として、決闘にたいする態度をとりあげておきたい。

決闘は、十九世紀末以降の時期になっても、将校や学生の間で依然として重要な意味あいをもっていた。軍隊内部では、傷つけられた名誉は決闘によって回復する義務があるという原則は生きつづけていたし、また、各大学の有力な学生組合の多くもこの原則を堅持していた。だが、このことは、カトリック教徒をきわめて困難で不利な状態に追いやるものであった。なぜなら、敬虔なカトリック教徒は、教会によってきびしく禁ぜられている決闘の原則には従いえなかったからである。その結果、カトリックの学生は、予備将校への昇進を拒否されたり、また、大学生活において差別をうけることになり、それは、ひいてはその後の市民生活でも多くの不利益を彼らにもたらすことになった。[2]

近年、ドイツの歴史家たちは、第二帝政期を論ずるにあたって、たんにユンカーや所有ブルジョアジーの役割だけでなく、いわゆる教養ブルジョアジーという当時のドイツに独自な存在により多く注目しはじめている。この教養ブルジョアジーとは、具体的には、高級官僚・大学教授・裁判官・プロテスタントの高級聖職者を核として、さらに医師・弁護士・作家・ジャーナリスト等をその周辺に配した一つのかなり明確なステイタス意識をもった社会グループである。そして、このグループの最大のメルクマールは大学教育をうけているということであり、したがってまた、それは決闘や学生組合や予備将校といったものにふかく刻印づけられていた集団でもあった。この教養ブルジョアジーは、帝政期のドイツの世論や支配的な価値観を形成するうえできわめて大きな役割をはたした。なぜなら、法律制度から芸術作品にいたるまで現実の解釈や秩序の構想を生み出すのは彼らであり、また、大学教育・出版物などを通じて世論を形成する手段も彼らの手に握られていたからである。[3]

このような教養ブルジョアジーの存在と役割に照らすとき、決闘問題にたいしてカトリック教徒がとった態度のもつ意味もよく

理解できるものとなろう。決闘への拒否的態度に象徴されるように、カトリック教徒は、教養ブルジョアジーによって操作される帝政期ドイツの支配的な価値体系にたいしては明確な一線を画していたのである。実際、教養ブルジョアジーの一つの重要な条件はプロテスタントであることであり、彼らの支配的な理念もまた、すぐれてプロテスタント的色彩に染め抜かれていた。そして、聖職者もふくめたカトリックの知的指導者たちは、社会民主党の指導者たちと同様に、この教養ブルジョアジーの世界からは排除されていたのだった。

(二) 同権運動と職業身分の問題　右に見たように、帝政期ドイツのカトリック教徒は、経済的社会的にさまざまの不利をこうむりながら、同時に、彼ら独自の価値観と生活様式によって一つのサブ・カルチャーを形成していた。ところで、社会民主党の場合と同様に、彼らもまた、その一体性を保持しながら、ドイツ社会全体のなかでその地位の向上をめざす運動をくりひろげた。その合言葉となったのは「同権問題」(Paritätsfrage) であり、それは、狭い意味では官僚の間におけるカトリック教徒の平等な待遇のことを指していたが、よりひろくは、ドイツ国家のなかでカトリック教徒を「第二級の市民」の地位から脱却せしめるための合言葉なのであった。④

このカトリック教徒の同権運動は、カトリック教徒内部における職業身分的な対立と関連づけて考察される必要がある。ドイツのカトリック世界は、すでに指摘したような職業構成上の偏りをもちながらも、貴族・大土地所有者、大企業家、手工業者、小売商人、ホワイト・カラー、労働者などの諸身分を内部にかかえているという点では、ドイツ社会の小宇宙であった。そして、これら諸身分の間には、工業化の進展とともに、ドイツ社会全体の場合と同じような利益の分裂や対立があらわれてくるのは避けられなかった。⑤

こうしたカトリック世界の遠心的な力は、文化闘争がいったん終熄したあと顕著な形をとってあらわれはじめる。なによりも、文化闘争期の貴族主導型の体制をゆり動かすものとして、ポピュリスト的傾向が中央党内部で頭をもたげてきた。それを端的にしめしたのが、一八九〇年代はじめのフーザンゲル事件であったといえる。それは、ヴェストファーレンの選挙区で、農民・手工業者などの勢力が貴族の候補者に対抗して独自の候補者フーザンゲル(新聞編集者)を擁立し、彼を帝国議会におくりこむことに成功した事件であった。⑥

しかし、中央党内部の対立は、たんに貴族層対中・下層という形だけであらわれたのではない。農業不況の影響化に農業者の運

動も活潑に展開され、そこでは貴族と農民が提携する局面もあらわれた。そしてまた、この農業者の運動とふかくからまりながら、手工業者の強制的な同業組合の復活をもとめる運動も展開され、こうした農業者や手工業者の運動は、全体として、職業身分制の樹立や反ユダヤ主義などの反近代主義的イデオロギーにふかく刻印づけられていた。[7]

だが他方、ライン地方を中心として、社会民主党の成長に刺戟されながら、カトリック系労働者の利益を顧慮した社会政策をもとめる運動もたちあらわれ、カトリック世界内部の利益調整はますます困難なものになっていった。[8]

一八九〇年代以降の中央党のめまぐるしい議会ならびに立法活動は、こうしたカトリック世界内部のさまざまの利益を反映したものだということができる。一八九七年の手工業者法や一九〇二年の農業保護関税法へのふかいかかわりあい、また、とくに一九〇〇～〇六年の時期に見られたポサドウスキの社会政策への協力などは、いずれも、カトリック系の手工業者・農民・労働者のそれぞれの利益への顧慮に発したものであった。[9]

もっとも、このようにいえば、結局はカトリック世界の動向はドイツ全体の縮図にすぎず、右にふれたような諸利益の対立やその政治への投影は、いずれもドイツ全体にあてはまることではないか、と指摘されるかもしれない。だが実際には、帝政期のカトリック世界は、一見ドイツ全体と同じようなリズムで動いているようにみえながら、やはり、すでに言及したようなカトリック独自のサブ・カルチャーや同権問題への関心を保持していた。折あるごとに学校、民法、ジェスイット修道会、官界における同権などの諸問題がもち出されたという事実がものがたるように、カトリック教徒の場合には、諸身分の個別的利益をこえたカトリック教徒全体の利害関心があったわけで、そのことが、彼らの世界を外の世界とは直接連動せしめなかったのである。では、もっと具体的に見た場合、カトリック世界とそれ以外の世界との間には、とくに政治との関連においてどんな差異が生み出されたのであろうか。

（三）エリートの問題

帝政期の新旧両教徒の二つの世界がしめした違いとして、もっとも重視されねばならないのはエリートの問題であろう。

従来から、いわゆる社会帝国主義のテーゼとの関連において、帝政期のドイツのエリートが官僚・軍部・政党・地域社会などのいずれの分野においてもいちじるしい連続性をしめし、根本的な転換を経験しなかったことが指摘されている。[10] ユンカー、大ブルジョアジー、教養ブルジョアジーなどの諸身分が社会の上層とし

て高い凝集力をほこりながら、社会・政治・文化の枢要な地位を独占するという状態は、第一次大戦まで基本的に変らなかったとされるのである。だが、このような図式を強調するあまり、帝政期のエリートの性格をまったく固定的なものとしてとらえることはつつしまねばならない。とくに、カトリック世界の内部に一歩足をふみ入れてみると、そこでは帝政期に重要なエリートの転換がおこっていたことが確認されるのである。

それは、なによりもまず、カトリック世界の政治指導における貴族の比重の低下という形をとってあらわれた。すなわち、一八九〇年前後からカトリック世界内部で急速にポピュリスト的勢力が台頭してくるのと並行しながら、中央党の指導部における貴族層のめだった後退が観察された。たとえば、一八八九年には中央党の帝国議会議員九八人のなかで貴族は四一人をしめたが、次の九〇年の選挙ではその数は一〇六人中三〇人に低下し、さらに九三年の選挙では九六人中一三人に減少し、もはや貴族グループは存在せぬも同然となった。そして、いまや、その選挙基盤のヘテロジーニアスな構造を反映して中央党議員団のなかには各職業身分の代表がおくりこまれることとなった。[11]

しかし、とくに注目すべき点は、一八九三年にリーバーが党首となって以後、中央党のトップの指導者たちは法律家（とくに弁護士）・大学教授・聖職者・自由職業の人びとによって構成されるようになったことである。[12] しかも、全体として見れば、彼らの出自は手工業者などの中間身分を多く含み（第2表参照）[13]、かつ、その人間類型もプロテスタントの教養ブルジョアジーに見られるそれとは大きく異なっていた。彼らは政治家としてきわめて活動的であったが、同時に出世欲や名誉欲にも富んでおり、しばしば風采も上らぬことと相まって、既成政治家たちの反撥を買うほどであった。[14]

第2表　中央党帝国議会議員団幹部の社会的性格
(1912年)

	職業	父親の職業
P. シュパーン	裁判官	車親方
Fr. X. シェードラー	聖職者	不明
A. グレーバー	裁判官	金細工師
M. エルツベルガー	著述業	仕立屋
C. フェーレンバハ	弁護士	小学校教師
J. ギースベルツ	労働組合書記	パン焼親方
J. グロワツキー	聖職者	不明
C. ヘロルド	農場主	農場主
F. ヒッツェ	教授	農場主
A. ホルン	教会役員	農業
E. イェーガー	出版業	開業医
R. ミュラー＝フルダ	工場主	不明
K. シュペック	官僚	不明
C. トリムボルン	弁護士	弁護士

このような新しいタイプの政治家を台頭させた要因としては、すでに指摘したようなポピュリスト的勢力の台頭、そして、それにともなうカトリック世界内部の利益調整の困難さをあげねばならない。自己の農業的利益に緊縛された貴族は、長期にわたるベルリンでの議会・立法活動に従事することがむずかしかったし、また、諸身分の利益の調整者としても適格性を欠いていた。この点、政治をみずからの職業とみなし、かつ、法律家のように特定の職業身分の利益との結びつきの少ない職歴の持ち主たちは、まさに新しい中央党のトップ・リーダーとして恰好の存在であった。

だが、こうした事情にもまして強調されなければならないのは、あのサブ・カルチャーと同権問題というドイツのカトリック教徒に独自な事情との関連である。もはや文化闘争期のような政治的孤立化におちいることなく、政府と至近距離をたもちながらカトリック教徒全体の地位の向上を獲得してゆくという課題――それをもっともよく遂行しうるのは、政治を通じて自己の威信やステイタスの上昇に情熱をもやしうる類の政治家たちであり、リーバー以後の中央党の指導者はそうした条件にかなっていたのだった。逆にいうと、ドイツの社会のなかでカトリック教徒がおかれていた独自な地位のゆえに、カトリック世界の内部では他の世界で見られなかったような新しいタイプの政治家たちの興隆がうながされたのである。[15]

こうして、あの社会帝国主義のテーゼが説くところとはやや違って、少なくともカトリック世界の内部では、帝国主義が推進される過程できわめて注目すべきエリートの転換が遂行されたのであった。帝国主義の推進が伝統的エリートの地位の保全に役立ったという社会帝国主義の解釈は、たしかに、プロテスタント世界には比較的よく妥当する。だが、カトリック世界にかんしては、むしろ帝国主義政策への支持とひきかえに新しい政治エリートの登場と地位の向上が促進されたという事情を見のがすべきではないだろう。

しかし、カトリック世界のエリートの問題にかんしては、たんに中央党の指導者ばかりでなく、さらに聖職者たちの役割と性格にも注目する必要がある。彼らこそは、ドイツのカトリック教徒の団結と一体性の保持にふかい関心を寄せ、また実際にその方向にむかって大きな政治的影響力を発揮した。とくに中央党が独自の地方組織をほとんどもちあわさなかったために、農民・労働者等の一般選挙民の把握にかんしては下級聖職者のはたす役割がきわ立って大きかった。実際、農民同盟や労働者協会の組織づくりと指導にあたったのもこれら下級聖職者たちであり、その結果、これらカトリック系の農民や労働者の組織は、たとえばユンカー

主導型の農業者同盟や社会主義系の労働者組織とはかなり性格を異にするものとなった。そのことはまた、カトリック世界内部の諸身分の利益調整にも大きな影響をおよぼしていたことを見のがしてはならない。[16]

ところで、カトリック聖職者たちの選挙民への影響力を考える場合、けっして忘れてならないのは、彼らの社会的出自の問題である。第3表[17]は帝政期の神学部大学生の出身階層を新旧両宗派にわたって比較したものだが、ここからも明らかなように、カトリック聖職者はプロテスタント聖職者にくらべてはるかに高い比率で社会の中・下層部分から補給されていた。プロテスタントにかんしては、聖職者の自己補給の比率が高いこと、また、高級聖職者たちは例の教養ブルジョアジーの身分に包摂され、その社会的出身階層も官僚の場合と似通っていたことが特色である。[18]これにたいして、カトリックの場合には、神学校などの教育機関を介して農民をはじめとする貧困な階層の子弟にも大学教育への道が開かれ、聖職者内部においても社会的流動性が高かったという事情を指摘することができる。[19]要するに、カトリック聖職者の階層秩序は、中・下層出身者にたいしてもひろく昇進と出世のチャンスを用意していたといえよう。

第3表　神学部学生の出身階層

父親の職業	プロイセン 1887—1900 (%)		ヴュルテンベルク 1876—1900 (%)	
	新教	旧教	新教	旧教
高級官吏	4	1	4	1
将校	1	0	0	0
教授	3	1	5	0
聖職者	23	0	34	0
医師・薬剤師	1	1	3	2
大土地所有者	0	0	1	0
企業家	5	5	7	0
上層	37	8	54	3
宿屋・食堂主人	16	31	14	32
農業	11	26	3	35
中級官吏	14	13	8	4
職員	2	3	2	1
教師	18	14	17	13
中層	61	87	44	85
労働者	1	4	2	3
下級官吏	0	0	3	7
下層	1	4	5	10
総数	5,769	2,195	1,350	1,089

こうした点までも視野に入れて考察すれば、帝政期のプロテスタントとカトリックの両世界の政治文化の相違はますます明らかだろう。そして、少し行論を先取りしていえば、エリートの問題にもっとも鮮明にあらわれた両世界の政治文化の相違が、後のナチスにたいする新旧両教徒の反応の違いの重要な伏線になるのである。

① 以上の帝政期のカトリック教徒にかんする記述は主として次による。H. Rost, Die wirtschaftliche kulturelle Lage der deutschen

Katholiken (Köln 1911); D. Blackbourn, The Problem of Democratization: German Catholics and the Role of the Center Party, in: R. J. Evans, ed., Society and Politics in Wilhelmine Germany (New York 1978).

㊸ K. Bachem, Vorgeschichte, Geschichte und Politik der deutschen Zentrumspartei, Bd. 9 (Köln 1932). S. 164 ff.; cf. Blackbourn, op. cit., pp. 169, 178 f.

㊹ K. Vondung, Zur Lage der Gebildeten in der wilhelminischen Zeit, in: ders., Hg., Das wilhelminische Bildungsbürgertum (Göttingen 1976), S. 20–33; H. Henning, Das westdeutsche Bürgertum in der Epoche der Hochindustrialisierung 1860–1914. Soziales Verhalten und soziale Strukturen. Teil 1: Das Bildungsbürgertum in den preussischen Westprovinzen (Wiesbaden 1972), S. 483 ff. ただし，イエスズは教義アルジェリアー間での決闘や予備学校の問題の意義を低く見る。Ibid., S. 489.

㊺ Blackbourn, op. cit., p. 170; Bachem, op. cit., Bd. 9, S. 64 ff.; J. K. Zeender, The German Genter Party 1890–1906 (Philadelphia 1976), pp. 7, 117; Rost, op. cit., S. 198 ff.; R. J. Ross, Beleaguered Tower: The Dilemma of Political Catholicism in Wilhelmine Germany (Notre Dame 1976), pp. 18 ff.

㊻ Zeender, op. cit., passim; Ross, op. cit., pp. 43 f., 79 f., etc; Bachem, op. cit., Bd. 5, S. 26 f.

㊼ Zeender, op. cit., p. 31.

㊽ Ibid., pp. 40 ff.

㊾ Ibid., pp. 14, 76 ff.; Ross, op. cit., pp. 79 ff.; H. Grebing, Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung. Ein Uberblick (München 1966), S. 125 ff.

㊿ Zeender, op. cit., pp. 47, 88, 93, etc.

(51) H.-U. Wehler, Das Deutsche Kaiserreich 1871–1918 (Göttingen 1973), S. 172 f., 235, etc.

(52) Zeender, op. cit., pp. 21, 35; R. Morsey, Die Deutsche Zentrumspartei 1917–1923 (Düsseldorf 1966), S. 50 f.

(53) Ibid.; Blackbourn, op. cit., p. 171; Bachem, op. cit., Bd. 5, S. 27 f., 29 f.

(54) 主として次により筆者が作成。Morsey, op. cit., S. 51, 561 ff.; Degeners Wer ist's? (Leipzig 1914).

(55) Bachem, op. cit., Bd. 9, S. 214, 376; Blackbourn, op. cit., p. 172.

(56) Ibid.

(57) Zeender, op. cit., pp. 47, 77, 118; U. Mittmann, Fraktion und Partei. Ein Vergleich von Zentrum und Sozialdemokratie im Kaiserreich (Düsseldorf 1976), S. 157 f; Thränhardt, op. cit., S. 81 f.

(58) G. Hohorst, J. Kocka u. G. A. Ritter, Hg., Sozialgeschichtliches Arbeitsbuch. Materialien zur Statistik des Kaiserreichs 1870–1914 (München 1975), S. 126; cf. F. K. Ringer, Education and Society in Modern Europe (Bloomington 1979), pp. 101, 306.

(59) Y. Spiegel, Die Führungsschicht der Evangelischen Kirche, in: ders., Hg., Kirche und Klassenbindung (Frankfurt a. M. 1974), S. 124 f.

(60) M. Spindler, Bayerische Geschichte im 19. und 20. Jahrhundert, Bd. 2, S. 765, 856 f.

三　カトリック教徒のナチ運動への免疫性

(一)　ナチ運動の性格

冒頭でも少しふれたように、従来のナチズム研究では、ワイマル末期にプロテスタント系中間層をナチスの支持へむかわせた要因として、中間層の経済的利害状況や身分意識が重視されてきた。そしてそれとの関連で、ナチスが農民・手工業者等の各職業身分にむけておこなった政策アピールや反近代主義的な身分制樹立の約束などにも注意がむけられてきた。

しかし、実際には、ナチスはけっして各職業身分ごとの利害にうったえることだけによって、その支持基盤をひろげていったわけではない。もしもナチスがそのような方向だけを追求しておれば、ナチスは多くの利益グループの寄せあつめと化し、その相互の利害対立のために自壊する危険があっただろう。ナチスが広汎な選挙民の獲得に成功したのは、各社会グループごとのうったえかけもさることながら、同時に、この運動のなかに各社会グループの個別的利益をこえた求心的な力がはたらいていたからであった。

では、その求心的な力とは具体的にはどんなものだったのか。これにたいする答えとしては、㈠ヒトラーのカリスマ、㈡民族共同体や反ユダヤ主義のイデオロギー、㈢厳格な党組織と集会戦術をはじめとする新しい宣伝の方法など、さまざまのナチ運動を特色づける要因をあげることができよう。これらの要因のいずれか一つを欠いても、ナチ運動の成功はおぼつかなかったにちがいない。しかし、説明をたんに複数の要因の列挙におわらせるのではなく、あえて一つの要因にしぼってやや誇張した形で呈示するとすれば、それは、結局はエリートの問題に帰着するのではなかろうか。この問題にかんしてもっていた独自な性格のゆえに、ナチ運動は、多くの利益グループのたんなる寄せあつめに堕することなく、しかも、ドイツ社会に大きな衝撃をあたえる運動に発展しえたようにみえる。

この点についてはすでに他の場所でも論じたことがあるので、[1]ここでの説明は最小限にとどめる。なによりもまず、ワイマル末期にナチスの進出のいちじるしかった地域を考察すると、いわゆるナチ革命の進行は地域社会におけるエリートの交代とふかくかからまりあっていたことがわかる。大量の選挙民がブルジョア政党からナチスへ支持を変えることのもっとも目にみえる効果は、その地域社会における伝統的な名望家層の後退、そしてそれに代る新しいエリート――その多くは中間層の下層部分の出身で、おおむね社会的背景や学歴にめぐまれない若い連中――の登場ということであった。これと同じことは全国レベルでも観察され、ナチスの台頭は、それまでのブルジョア政党にも社会主義政党にも見

られなかった新しいタイプの政治家たちの興隆をうながしたのだった。

そして重要なのは、このようなエリート交代の現象は、たんなるナチス台頭の副産物や随伴現象だったのではなく、むしろ、ナチ運動の初期以来の長期的戦略の結果だったということである。ナチスは、ほぼ一九二八年ごろまでに、小規模ながらも、その内部に既成のブルジョア政党とも他の民族主義団体とも異なるエリート構造をもつ新しい型の政党に成長をとげていた。そして、その思想的もしくは理論的前提とでもいうべきものは、すでに党の綱領（第二〇条）や『わが闘争』のなかであたえられていたのである。その場合、とくに注目にあたいするのは、『わが闘争』のなかの「腐敗した卑怯なブルジョア社会」「ブルジョアジーの無力」「インテリのもつあわれな無力さ」といった表現であろう。こうした言葉にしめされるように、ヒトラーは、あの帝政期以来の教養ブルジョアジーの伝統に立つ既成エリートにはげしい批判と攻撃の照準をさだめていたのだった。いってみれば、ナチズムとは、ドイツ社会におけるエリートの編成変えを志向する運動だったのであり、まさにそのことが、たんなる民族主義や反ユダヤ主義の宣伝によっては獲得できない吸引力をこの運動にあたえたのだとみなすことができる。

第4表　ブルジョア政党国会議員の職業（1925年）

職業	中央党・バイエルン人民党	国家人民党	人民党	民主党
経済界上層	2	6	10	3
官僚	5（1）*	11	5	2
司法官僚	6（2）	8	2	2
将校	—	3	—	—
大学教授	5（1）	6	3	4
弁護士	5	3	4	3
法律顧問	1	5	3	2
医師・薬剤師	1（1）	—	—	1
ジャーナリスト・著述業	—	1	3	1
聖職者	4（2）	4	—	1
教師	8（1）	7	4	3
職業政治家・団体役員	4	2	3	2
商業関係者	2	—	4	—
自営業者・手工業者	3（1）	7	1	4
職員・下級官吏	3	5	2	2
農業・農業団体役員等	20（6）**	33***	4	—
労働者・労働団体役員	18（4）****	6	3	2
主婦	1	1	—	—
計	88（19）	109	51	32

* 括孤内はバイエルン人民党議員の数をしめす。 ** 1920年当時，13人の農業関係議員中2人が大土地所有者，他の9人は小規模の農業経営者。*** 1920年当時，20人の農業関係議員中9人が大土地所有者，他の11人が小規模の農業経営者。 **** このうち，2人が大学出身者，9人が手工業経験者，5人が労働者。

（二）ワイマル期のカトリック政治エリート

さて、

ナチ運動が右のような仕方でエリートの問題とふかく結びついていたとすると、最初からこの運動のカトリック教徒への浸透には大きな限界が予想されねばならなかったであろう。なぜなら、すでに第二章で説明しておいたように、とくにエリートの問題にかんしてカトリック世界はプロテスタント世界とは違った道をあゆみ、したがってまた、帝政期以来の伝統的エリートにたいするヒトラーたちの批判や攻撃は、プロテスタント世界には衝撃をよびおこしえても、カトリック世界のエリートにはそれほど痛痒を感じさせるものではなかったからである。

すでに帝政期に見られたエリートの問題についての新旧両教徒の世界の差は、ワイマル期に入ってもけっして消滅してはいなかった。少なくとも、ワイマル期のカトリック政党（中央党およびバイエルン人民党）と他のブルジョア政党との間には、エリートの性格についての大きな相違がみとめられた。そのことは、たとえばこの時代の各党国会議員の職業構成などを比較してみても、ある程度まで気づかれることであろう（第4表参照②）。カトリック政党の場合のもっともめだった特徴は、農業界と労働界の出身者の比率がきわめて高いことである。もちろん、国家人民党における農業界の比重はさらに高いが、そのなかには貴族・騎士領所有者をはじめとする大土地所有者が多くふくまれており、農民的比重の高いカトリック政党の場合とは対照的であった③。人民党や民主党になると、農民・労働者の比率はとるにたらず、それにひきかえ、企業家層や、またかつての教養ブルジョアジーの系譜をひく階層の出身者が大きな比重をしめ、全体としてこれらの党の名望家的性格を印象づける構成となっていた。

だが、たんに農民および労働者のしめる比率が高いということだけが、カトリック政党の議員団の特色ではなかった。官僚・教師・手工業者等もそれぞれ議員団のなかに代表をおくりこみ、議員団が全体として職業身分代表制の性格を濃くおびていたことも、カトリック政党の場合の重要な特徴であった。それに、帝政期の場合と同様に、法律家・大学教授・聖職者等が議員団のなかで大きな一角を形づくり、各職業身分間のいわば止め金の役割を演じていたことも見のがしてはならない④。

エリートの性格にかんするカトリック政党と他のブルジョア政党との差は、地方議員のレベルに下降してゆくと、いっそう顕著になるだろう。第5表⑤は一九一九年の選挙後におけるエッセン市議会議員の職業構成をしめしたものだが、これを見ても、中央党の議員が職業身分代表的な性格をつよくもち、したがってまた、他のブルジョア政党に比して中・下層の各社会グループにも一定の議員の比率が確保されていることがよくわかるだろう。このよ

うなエッセンの事例はけっして孤立したものではなかった。というのも、中央党は、一九二〇年の党大会で、地方の支部組織が各職業身分ごとの委員会を設置することを勧告し、しかも、これらの職業身分別の委員会に選挙のさいの候補者の提案権もみとめるにいたっていたからである（ただし、この権限は一九二五年に廃止された）。その結果、二二年までに、商工業・農業・労働者・官僚・職員の各委員会がとくにライン・ヴェストファーレン地方の支部組織に設置され、それぞれが選挙のさいの候補者を提案するにいたっていた。右に見たような中央党議員団の職業身分代表的な性格は、こうした事情の反映にほかならなかったのである。⑥

第5表　エッセン市議会議員の職業（1919年）

職業	多数派社会民主党	独立社会民主党	中央党	国家人民党 人民党	民主党	ポーランド党
労働者	12	8	12	—	—	2
手工業者	2	—	2	1	—	—
商人	—	—	5	2	—	—
教師	2	—	6	1	2	—
鉄道・郵便官吏	1	—	3	—	1	—
職員	2	—	7	6*	1	—
その他の官吏	1	—	4	2**	1	—
農業	—	—	2	—	—	—
工場主	—	—	—	2	—	—
自由職業	1	—	5	1	—	—
主婦	1	1	—	1	1	—

＊ 殆んどが指導的地位にある者（支配人，経営管理者，経営代理人等）。
＊＊ いずれも大学出身者。

このようなカトリック政党のエリートの特性は、ワイマル末期にナチスが台頭してきたとき、きわめて重要な意義をもつことになった。ナチスは主として中間層を対象に職業身分的秩序の樹立をうったえ、また、ブルジョアジー出身の既成のエリートを攻撃して、中・下層の野心的分子に新たなエリートへの道を開放しようとした。だが、こうしたことの多くは、カトリック世界にかんするかぎり、けっして目新しいものではなく、彼らの間ではかなりの程度まですでに実行にうつされていたのである。そしてまた、そのことが、ナチスにたいするカトリック政党と他のブルジョア政党との対応を分ける一つの大きな理由となったのだった。

（三）カトリック聖職者の性格と役割　ここでことわっておかねばならないが、ワイマル期のカトリック政党は、けっしてつねに同程度の選挙基盤の安定性をほこっていたわけではなかった。それどころか、ナチスが台頭する以前の一九二八年ごろまでは、むしろ、選挙ごとに中央党およびバイエルン人民党の得票の先細

り傾向がみられ、カトリックの識者たちの間にも一種の危機感をよびおこしていた。[7] そしてその原因となっていたのは、ほかでもなく、カトリック世界内部における各職業身分グループ間の利害対立であった。つまり、カトリック政党は、すべての職業身分の利害を顧慮することによってカトリック教徒の一体性をはかろうとしたのだが、各職業身分間の利害の対立は、ともすれば遠心力によってカトリック世界の団結をおびやかしていたのである。一九二〇年に中央党からバイエルン人民党が分離したのも、ライン地方の労働者とバイエルンの農民との利害対立を反映したものだったといえる。そしてその後も、二つのカトリック政党は、とくにバイエルン農民同盟・経済党・キリスト教社会帝国党などの、すぐれて特定の職業身分の利害に結びついた政党の出現や活動によって、その支持基盤を少しづつ浸蝕された。また、この関連では、二〇年代後半に中央党内部で官僚グループと労働者グループの対立が深刻化していたことも見のがせないだろう。しかも、いっそう重要なことは、カトリック世界内部の利益調整に大きな役割をはたしてきた中央党独自の指導層（法律家・教授など）もようやく老齢化し、往年の積極的な指導力を発揮できなくなっていたことである。こうして、二〇年代末期には、カトリック政党は活力をうしない、内部の利害対立のために低迷状態におちいっていたのである。[8]

興味ぶかいのは、このようにむしろ下降傾向にあったカトリック政党が、ワイマル末期のナチス台頭という事態にたいしては俄然大きな抵抗力をしめし、カトリック教徒の団結性を相当程度まで回復したという、まさにその点である。それは、すでに議員の場合を例にして見たような、これら政党のエリートの性格によるところが大きかった。だが、カトリック世界のエリートといえば、第二章でも指摘したとおり、どうしても聖職者の性格と役割にふれないわけにはゆかないだろう。実際、一九二八年にカースが中央党党首に就任したところを境として、カトリック世界では聖職者たちの政治活動が急速に活潑化しつつあった。そして、カトリック教徒をナチスの大幅な浸蝕からまもり、彼らを中央党とバイエルン人民党にひきとめる点で、聖職者たち――とくに下級聖職者たち――のはたした役割は、おそらく、議員などのカトリック政治家以上に大きかったのである。[9]

わたしたちは、一九三〇年ごろから、カトリック教徒の間における復活祭の聖体拝領者の比率が増大している事実に注目する必要がある。[10] そのことに端的にしめされるように、ワイマル末期のカトリック教会関係者たちは、信仰の危機をうったえ、文化闘争期の感情をカトリック教徒の間によみがえらせることによって、

中央党およびバイエルン人民党を中心とするカトリック世界の政治的団結性をたかめようとしたのだった。それは、過去の歴史においても、カトリック世界内部の利害対立がふかまり、政治活動が低迷におちいったときにくりかえし用いられてきた常套的手段であった。だが、聖職者を前面に立ててくりひろげられたこの戦略がナチスの台頭という事態を前にしてとくに大きな有効性を発揮したという点に留意する必要があろう。そして、そのことの理由は、すでにヒトラー自身が『わが闘争』のなかで相当程度まで説明していたのである。

「この点（人材選抜という点）で、カトリック教会は、模範とすべき教訓例になりうる。（カトリック教会では）神父たちの結婚が禁ぜられているために、聖職者の後継者は彼ら自身の間からではなく、広汎な民族大衆の間から選び出してこなければならない。独身制度がまさにこういう意義をもっていることを大抵の人びとは理解してはいない。独身制度は、このきわめて古い制度（教会）に信じがたいほどの活力がそなわっていることの原因なのだ。すなわち、聖職者という名誉ある地位をになう人びとの大群が、たえず諸民族の最下層から補給されている――そのことのために、教会は、民族の感情世界と本能的な結び付きをたもちうるばかりでない。さらに、そういう形で永遠に民族の広汎な大衆のなかに存在しつづける多くのエネルギーと活力を、みずからのものとすることができるのだ。[11]」

この『わが闘争』中の記述から知られるように、あのナチスに独自とおもわれたエリートの構成方法は、実は、ヒトラーがカトリック教会の聖職者補給のシステムから学びとったものであったのである。いいかえれば、この点において、ナチ運動とカトリック世界とはきわめて相似かよった性格をもっていたのだった。とすれば、ナチ運動が、同じエリートの構成方法をもちあわさないプロテスタントの既成政党にたいしては大きな衝撃をあたええても、カトリック政党にたいしてはほとんど無力であったことも理解できるだろう。

とくに村落などのレベルで、底辺のカトリック聖職者たちがナチスの民衆への浸透にたいして、いかに強固な防波堤となりえたか――そのことは、第三帝国時代に入ってからのナチ側の史料によっても確認できる。村落のレベルでは、とくにナチ系の小学校教師が民衆にナチズムを吹きこむ尖兵の役割を演じたのだが、たとえばバイエルン地方のカトリック村の場合、彼らは聖職者たちの厚い壁の前に敗退してゆく場合が多かったのである。[12]

この関連で興味ぶかいのは、同じバイエルン地方でも、プロテ

スタント系の村落の場合には、ナチスの進出とともに聖職者の地位がおびやかされることが多かったらしいという事情である。[13] このようにカトリックとプロテスタントの村でナチスの進出にたいしていちじるしい反応の相違が生じたのも、両宗派の聖職者の社会的性格の違いによるところが少なくなかったと考えられる。すなわち、その出身階層から見て、カトリック聖職者たちが農民的世界にふかく根をおろしていたのにたいし、プロテスタントの聖職者はもっと上位の階層とむすびついていた。しばしば指摘されるように、ワイマル期のプロテスタンティズムは、その反共和主義的イデオロギーによってナチスの台頭に貢献したのだが、階層的に見れば、ナチズムのエリート理論の恰好の攻撃対象になりうる性格をもっていたのだった。それだけに、第三帝国の時代に入ってナチスが実際に村落共同体のなかへ浸透してきたとき、大きな脅威にさらされたのも彼らプロテスタントの聖職者たちであった。しかし、同時にまた、この世界からナチズムにたいするもっとも果敢な抵抗——ただし、いわゆる「伝統的エリートのレスポンス」としてのそれ——の闘士もたちあらわれることになったのである。[14]

いずれにせよ、こうした第三帝国時代の事情からも、なぜワイマル末期のカトリック教徒がプロテスタントにくらべて、ナチスにたいするより多くの免疫性をもっていたかということも、ある程度解明できるであろう。同時に、そこからナチズムの本来の推進力が何であったかも、示唆される筈である。

① 前掲拙稿および拙稿「ワイマルからヒトラーへ」（野田編『二〇世紀のヨーロッパ』所収、有斐閣新書、一九八〇年）。

② 主として次により筆者が作成。M. Schwarz, Hg., MdR. Biographisches Handbuch der Reichstage (Hannover 1965); M. Müller-Jabusch, Hg., Politischer Almanach 1925 (Berlin u. Leipzig 1925); Degeners Wer ist's? (Leipzig 1928).

③ cf. G. A. Ritter, Arbeiterbewegung, Parteien und Parlamentarismus. Aufsätze zur deutschen Sozial- und Verfassungsgeschichte des 19. und 20. Jahrhundert (Göttingen 1976), S. 146; Morsey, op. cit., S. 154 ff., 324 f.

④ Ibid., S. 295, 319, 325, 436, etc.

⑤ Kühr, op.cit., S. 79.

⑥ Ibid., S. 78 f.; Morsey, op. cit., S. 595f.; H. Grebing, Geschichte der deutschen Parteien (Wiesbaden 1962), S. 96.

⑦ J. Schauff, Das Wahlverhalten der deutschen Katholiken im Kaiserreich und in der Weimarer Republik (Mainz 1975), S. 191 ff.

⑧ Grebing, Geschichte der deutschen Parteien, S. 104 f.; Morsey, op. cit., S. 582, 616, 619 ff.; Kühr, op. cit., S. 65, 232, 235, 250; G. Plum, Gesellschaftsstruktur und politisches Bewusstsein in einer katholischen Region 1928–1933. Untersuchung am Beispiel des Regierungsbezirks Aachen (Stuttgart 1972), S. 29.

㊿ Schaap, op. cit., S. 185, 208; Kühr, op. cit., S. 67 ff., 260, 277.

(51) Kühr, op. cit., S. 53, 277, 281.

(52) A. Hitler, Mein Kampf (München 1937), S. 481.

(53) Broszat u. a., Hg., op. cit., S. 492 f., 506 ff., 530 ff., 551, 623 f., etc.

(54) Ibid., S. 404 f., 410, 420, etc.

(55) F.-M. Balzer, Kirche und Klassenbindung in der Weimarer Republik, in: Spiegel, Hg., op. cit., S. 48 f.; K.-W. Dahm, German Protestantism and Politics 1918-39, in: Journal of Contemporary History, Vol. 3, No. 1 (1968), pp. 29-49; F. O. Bonkvsky, The German State and Protestant Elites, in: F. H. Littell and H. G. Locke, ed., The German Church Struggle and the Holocaust (Detroit 1974), pp. 124-147.

(京都大学教養部助教授 [redacted])